（平成 13 年1月 10 日発行）

会報

第７号

北海道高等学校世界史研究会
事務局 北海道札幌平岸高等学校
〒 062-0935 札幌市豊平区
平岸５条 18 丁目
☎ (011)812-2010 ／ FAX(011)812-2049

２１世紀の開幕と世界史教育

北海道高等学校世界史研究会
会　長　　櫛　井　征四郎
（北海道名寄恵陵高等学校長）

新年明けましておめでとうございます。

いよいよ21世紀が開幕しました。我々は2世紀をまたがって生きることになるわけですが、これまでの20世紀はどんな世紀であったのでしょうか？

ある人は2つの世界大戦があったことから「戦争の世紀」であったと言い、また、ある人は「社会主義の世紀」であったとも、「核とコンピュータ出現の世紀」であったとも言います。それでは、これからの21世紀はどんな世紀になるのでしょうか？

人類の課題として、地球の温暖化や人口爆発による環境の悪化と保全、食糧やエネルギー問題の克服、南北問題をはじめとする様々な格差の是正、民族や国家間の紛争の解決、核やコンピュータの制御など沢山挙げられますが、新世紀の展望に関しては、楽観論よりも悲観論の方が多いように思われます。

21世紀はまちがいなく「コンピュータの世紀」になることでしょう。豊かな生活を目指すかぎり、好むと好まざるとにかかわらず、今まで以上にコンピュータなしでは考えられない時代がやって来ると思います。

しかし、コンピュータは「ジキル博士とハイド氏」のように二重人格を有します。

コンピュータ自体が悪いのではなく、あくまでもそれを使う人間の問題なのですが。

１９６８年に異色の監督Ｓ・キューブリックがＳＦ映画『２００１年宇宙の旅』を作り、進化したコンピュータが遂に人間を支配しようとする恐ろしいストーリーを描きましたが、 道具としての使い方を誤ると、この話は絵空事で済まされなくなります。

政治・経済、科学技術や医学などの世界でも、これからはますます人間の倫理観が問われる時代が来るでしょうし、また、倫理観がなければ明るい未来はないと思います。

これからの世界史教育には今まで以上に、確かな歴史観や世界観が求められ、硬直したイデオロギーではなく、柔軟な思考力や自己変革が求められます。生徒と共に学ぶ姿勢こそ、新しく希望に満ちた世界史教育の可能性を開く道であると確信しています。

第３１回研究大会記録

日　　時　　平成１２年８月４日（金）
会　　場　　札幌市教育文化会館　大研修室

講　　演　　小山　皓一郎　氏
（北海道大学文学部教授）
研究発表　　武田　秀治　　氏
（北海道札幌開成高等学校教諭）
司　　会　　石川　麻紀子　氏
（北海道瀬棚商業高等学校教諭）
遠藤　　忍　　氏
（北海道札幌東高等学校教諭）
記　　録　　奥田　　尚　　氏　（北海道湧別高等学校教諭）
菊池　真哉　　氏　（北海道札幌白陵高等学校教諭）

講演

「オスマン帝国のユダヤ人」

北海道大学文学部教授
小山　皓一郎　氏

まずユダヤ人に関してであるが、よく書店で「ユダヤ人」という文字がおどっているが、純学術的な本は少ないようである。それは日本だけではなく、例えば私が昨年行ったトルコでも「ユダヤ人の陰謀」のような反ユダヤ感情を煽るようなものがあった。その反面、ユダヤ人の歴史・ユダヤ人についての学術的な本は意外と出ていない。ユダヤ人の歴史はかなり長く、古代ユダヤ人の歴史やあるいはまた最近のパレスチナにおけるイスラエルとの国際問題に関しては、多数の研究があり、本も出ているが、その中間と言うか中世のユダヤ人の歴史については、あまり研究が進められていないのが現状である。

西アジア・中近東と呼ばれる地域はムスリム（イスラム教徒）だけの住んでいる地域と錯覚を起こしてしまうが、しかしイスラム世界というのは過去においても現在においても常に、キリスト教徒・ユダ

ヤ教徒というマイノリティがいて彼らは人口から言うと圧倒的に少数ではあるが、歴史の上ではかなりの役割を果たしている。そして今後も果たす可能性がある。

私はオスマン帝国が専門なので、オスマン帝国におけるユダヤ人について今調査中であり、言わば結論が出ていないような状態なのだが、今回話をさせていただきたい。

まずオスマン帝国という国家であるが、１２９９年に草創されて１９２２年に滅亡した。従って昨年はちょうど７００年ということになり、トルコの首都アンカラでは「オスマン帝国草創７００年記念トルコ史学会」という国際学会が開かれて、私も出席した。ただしオスマン帝国が最初から帝国であったわけではない。最初はちっぽけなアナトリア西北部の国家であったが、それが非常に短期間に勢力を拡大させて１４５３年にコンスタンティノープルを征服してビザンツ帝国を滅亡させた後には、ビザンツ帝国の支配領域、さらにはそれを上回る領土を支配する大帝国になる。だから私は、オスマン帝国というのは１４５３年のコンスタンティノープル征服以後と考えるのが良いと思う。バルカンのキリスト教民族、東方のアラブ諸民族、北アフリカのアラブ系イスラム教徒はみな支配下に入り、よく言うヨーロッパ・アジア・アフリカ３大陸にまたがる大帝国を築きあげたわけで、当然ながらそこには様々な民族が住んでいる。だからオスマン帝国においては、「スルタン」と言われる皇帝のもとに一君万民であって、近代国家ではないから国家の主権は全てスルタンに集中している。後は全て民であり僕である。

そしてまたオスマン帝国の支配下に入った諸民族は自らを「オスマンル」と呼ぶ。「オスマンル」とは「オスマン王家の家来、オスマン臣民」というような意味である。この言葉には何らエスニックな、人種的な意味はなく、また宗教的な差異もない。オスマン帝国には様々な民族・宗教があり、オスマン王家は正当なムスリムでイスラム教が上位にあることは動かないのだが、それと並んでキリスト教徒とユダヤ教徒も特別な地位を与えられて、彼らの存在は保証されていた。

イスラム教徒にとって我々日本の仏教や古代ペルシアのゾロアスター教というのは、全くの偶像崇拝であって邪教以外の何者でもないが、キリスト教・ユダヤ教について言うならば、ルーツは同じとするもので、もともとはユダヤ教があって、それからキリスト教、そして一番最後に出てきた預言者ムハンマドというアラブ人がユダヤ教とキリスト教両方を知った上で、自分が最も新しい預言者だとして両教を修正して始めたのがイスラム教なのである。だからムスリムにとってキリスト教やユダヤ教は異端ではない。ただ最もすぐれている、正しいのがイスラム教だと考えている。従ってキリスト教徒・ユダヤ教徒はオスマン帝国だけではなく、イスラム国家においては「契約の民」と呼ばれ、これを「ジンミー」と言う。これはジンマを与えられた民という意味で、ジンマとは生存と財産を保障するという契約のことである。イスラム教の教えというのは預言者ムハンマド自身が商人であったことからもきていると思うのだが、もともと都市の商人の間から出てきた宗教であり、神と人間との関係全てを契約という形でとらえている。だから「ジンミー」が契約の民と呼ばれるのもそこからきているのではないか。

キリスト教徒・ユダヤ教徒はムスリムと同じ権利はないが、生命と財産は完全に保障されるという立場にあった。オスマン帝国においては、バルカン半島はほとんどキリスト教徒である。だが最初から最後までこのキリスト教徒をムスリムへと改宗させようとは意図していなかったようである。確かにアルバニアやボスニアにはムスリムが多いではないか、と言われるかも知れないが、それは地域的事情で改宗していった者で、決して強制されたものではない。オスマン帝国に限らずイスラム国家の支配者にとっては、自分の支配下にあるキリスト教徒・ユダヤ教徒を無理やり改宗させるよりも、彼らの信仰・生命・財産を維持して代わりに彼らから人頭税（ジズヤ）を徴収する方がはるかに有益であると考えたのである。この後彼らがムスリムへと改宗してしまうと、人頭税という大きな財源を失うことになってしまう。キリスト教徒には「ミッショナリー」という概念があって、どんどん異教徒を改宗させていく

宣教師、フランシスコ＝ザビエルのような存在もあったのだが、イスラム教においては異教徒を積極的にムスリムに変えていく、というようなことは言われない。ただ常に門戸は開いていて自発的に改宗したい者はどんどん改宗してよい、そしてそれを受け入れるという姿勢である。オスマン帝国においてはそのようなことから、ムスリムよりは劣勢であるがバルカン半島ほぼ全域はキリスト教徒で満たされていて、イスタンブルのような都市でも半数は非ムスリムで占められていたので、彼らは「ミッレト」という、言わば自治的な共同体で組織されていた。

「ミッレト」は「ミッレト制」と言われ、オスマン帝国におけるイスラム以外の宗教に属する人たちに対する基本的な政治制度になっている。そして3つのミッレトがあった。ミッレトは「自治共同体」だと言ったが、「宗教共同体」と訳す人もいる。宗教に基づいて作られた共同体で、その中で大幅な自治が認められているということである。筆頭に来るのがギリシア正教のミッレトで、これはバルカンのギリシア人、セルビア人、ブルガリア人といった人々である。これはコンスタンティノープル総主教を首長としており、オスマン帝国のスルタンの威光のもとで、バルカンの全ギリシア正教徒を監督する地位にあった。2番目にはアルメニア正教というのがある。アルメニア人というのは現在は小さな国を形成するに過ぎないが、民族的には昔からアナトリアの各地に住んでいて、言わばトルコ人が現在のトルコにやって来る前の先住民族の1つであった。アルメニア人は非常に個性的な民族で、ギリシア正教とは異なる彼ら独自の教会を持っている。アルメニア正教と言って、そのミッレトがあり、その首長はカトリコスと呼ばれている。その次に、数的には一番少ないがユダヤ教徒のミッレトがある。これらギリシア正教徒・アルメニア正教徒・ユダヤ教徒の3つが、オスマン帝国において信仰・生命・財産を保障されていたのである。オスマン帝国自体はそれぞれの首長を任命して、その首長を通じて彼らを間接的に支配していた。間接統治の方が有効であると考えていたようである。だから例えば、今年度のギリシア正教徒に対する納税額がいくらと決められると、それを確実に徴収しオスマン政府に納める義務と責任をコンスタンティノープル総主教は負わされるのである。アルメニア正教会におけるカトリコス、ユダヤ教団におけるハハムバシ（ラビの長）も同じである。事実上、各ミッレトの首長というのは租税徴収の責任を負わされるので、容易なことではない。その代わりそれぞれのミッレトの中で起こった、例えば犯罪などの問題については原則として全てそのミッレトの内部で解決することになっていた。これは近代国家においては治外法権になる。実際19世紀になってオスマン帝国の勢力が衰えて西欧列強の支配下におかれるようになると、これらミッレトが自治権を持つことが治外法権であるという形になってしまった。こういうミッレトという形でオスマン帝国の非ムスリムたちを組織していくやり方がいつ確立されたかというと、征服者メフメト2世がコンスタンティノープルを征服した直後、3日後には各宗教の首長を集め任命していた、と言われている。

ただ先にビザンツ帝国時代のユダヤ人についてもふれておく必要があるかと思う。オスマン帝国におけるユダヤ人というのは、オスマン帝国がコンスタンティノープルを征服した後は、かつてのビザンツ帝国の領土を継承した形になる。従って住民もビザンツ帝国から続いている。だからユダヤ人というのは、トルコ人が中央アジアからやって来るより前からアナトリアに住み着いていたわけで、西暦70年に古代ユダヤ帝国がローマ帝国によって最終的に滅ぼされると、ユダヤ民族はいわゆる「亡国の民」となって世界各地に分散していくことになる。これを「ディアスポラ」と言う。しかしながら、そのまま絶えてしまわず恐るべき生命力をもって、行った地域で粘り強く生き残ってきた。我々日本列島にはユダヤ人が来た、という記録は皆無だとは思うが、中国にはユダヤ人が現れたという記録があるそうで、その他中央アジアから西アジアまで、それからヨーロッパまでユダヤ人の姿が見えない地域はほとんど無いと言っていいくらい、どこでも彼らの姿は認められた。しかも亡国の民ということでは、例えばジプシーなども同じだが、ユダヤ人の特異な点として、どこに行っても非常な能力を持って、少なくとも

経済的には優位であること、また学問でもその能力を発揮して、人口が少ないわりには歴史的に大きな足跡を残している。ただもう一つどこでも言えることは、ほぼ例外なく迫害の対象になるということである。ビザンツ帝国時代のユダヤ人を調べておく必要があるというのは、それをオスマン帝国がそのまま継承した形になるわけで、ビザンツ帝国時代のイスタンブルあたりにいたユダヤ人のことを「ロマニオート」と呼んだ。これはローマのユダヤ人という意味である。ビザンツ帝国においてユダヤ人がどのような地位にあったか、という話であるがユスティニアヌス法典の中において法的な地位を規定されており、私有財産を保障されている。また反ユダヤ的な行為も禁止されている。しかし実際には後に、ユダヤ人は様々な差別と敵意の対象とされていて、シナゴーグ（ユダヤ教の礼拝堂）は古いものはそのまま維持してよいが、新築することは許されないとか、ユダヤ人は絶対に馬に乗ってはならない、行政職にはつけない、ヘブライ語の使用制限など、かなりの抑圧のもとにあった。だから決してビザンツ帝国時代のユダヤ人の地位は恵まれてはいなかったと言われている。

１２世紀後半のコンスタンティノープルのユダヤ人については、トゥデラのベンヤミンによる旅行記が重要な史料だとされている。そのレポートによれば、ユダヤ教徒が２５００人いてそのうち正統派（ラビ派）は２０００人、カライ派（厳格派）が５００人であり、あまり多くはない。カライ派　というのはこの後ずっと存続するが、これは正統派がタルムードと呼ばれる教典とその注釈書からの膨大な伝承を聖典の１つとして尊重しているが、カライ派はモーセの五書と呼ばれる旧約聖書の最初の五書が聖典であって、それ以外のものは認めないという厳格なユダヤ人である。ベンヤミンによると、コンスタンティノープルのこの正統派とカライ派のユダヤ人はお互いの間を壁で隔てて非常に仲が悪い、と書いている。それからまた彼らの生業で最も多いのは皮なめし職人であって、それは非常に臭気を漂わせるものであったので、そのため一般のキリスト教徒には嫌われている。以上のようにビザンツ帝国におけるユダヤ人の地位というのは、その継承者であるオスマン帝国のものよりも決して勝ってはいない、むしろ悪かったとさえ言えるのではないかと思う。

その中で特にユダヤ人が迫害されたのは、いわゆる第４回十字軍のラテン帝国の時代である。この時の十字軍は、本来ならまっすぐ聖地エルサレムを奪いに行くはずなのに、スポンサーがベネチアの商人であったことから経済的な理由でエルサレムではなく、コンスタンティノープルを占領した。そしてそこにいたビザンツ皇帝を追い出して、１２０４～６１年の間ここを占拠した。これがラテン帝国である。当時の十字軍というのは非常に無知蒙昧、というのは言い過ぎであるが、宗教心があつく、ユダヤ人に対する偏見が非常に強かった。カトリックに関しては最近、ローマ法王が過去のユダヤ人に対する迫害をエルサレムの嘆きの壁の前に行って正式に謝罪して大きく報道されたが、当時のキリスト教徒にとってユダヤ人というのはイエスを磔にした敵である、という見方であった。従ってラテン帝国においてはユダヤ人の迫害が多く行なわれ、ラテン帝国時代のコンスタンティノープルにおいてしばしば失火による大火災が起こったが、その度に犯人はユダヤ人だとされてユダヤ人地区が迫害されて財産が略奪された、と伝えられている。

オスマン帝国第７代スルタンのメフメト２世、彼はコンスタンティノープルを征服したことから「征服者」と言われているが、彼は１４５１年から約３０年間在位し、オスマン帝国３６代のスルタンの中で最も傑出した人物だと私は思う。オスマン帝国の体制というのは彼の時代に確立して、それが滅亡まで受け継がれる。そういう言い方ができるほど彼は優秀な人物だが、このスルタンのユダヤ人に対する態度というのが一貫して、ユダヤ人を優遇するというものであった。ユダヤ人のように迫害されている人々にとっては、支配者の政策が一貫しているということが一番大事なことなのである。政策が昨日と今日で著しく違う、というよりは余り良くなくてもそれが一貫して変わらないという方が安心感を与えて、そういう場所にはユダヤ人はずっと住み続ける

のである。裏を返すとユダヤ人がどんどん去っていくような国家は危ない状態にある、とさえも言える。このメフメト2世こそが、非ムスリムのギリシア正教徒・アルメニア正教徒・ユダヤ教徒をミッレトという宗教的な自治共同体に組織することを計画的に遂行した人物である。ユダヤ教について言うと、メフメト2世はコンスタンティノープルの陥落の3日後と記録にあるが、市街にいたユダヤ人の指導者であるエリヤ・カプサリという人物を呼び出して、これを自らユダヤ人ミッレトの首長に任命している。エリヤ・カプサリという人物は学者の家系で、その子孫たちもオスマン帝国においては代々学者として名を成している。まずこのような形で、メフメト2世はコンスタンティノープルにいたユダヤ人たちをビザンツ帝国の時よりも優遇してそのまま継承していた、と言えると思う。ただそのような新しい支配者メフメト2世が、首都コンスタンティノープルにおいてユダヤ人たちに対し当時としては極めて温厚な政策をしいたという評判はたちまち広がって、遠くヨーロッパ中央部、ドイツ諸邦からもユダヤ人たちが主にイスタンブルへ流入してきたのである。このドイツ諸邦からのユダヤ人のことを「アシュケナジム」と言う。

中世から現代にかけてユダヤ人には大きく分けて2つの系統があって、それはスペイン系のユダヤ人とドイツ・東方系のユダヤ人である。どこが違うというと、一番の違いは用いている言語である。もちろん宗教上の言語は両者ともヘブライ語であるが、一般のユダヤ人が日常的に用いている言語は、アシュケナジムの場合はイデッシュ語といってドイツ語をベースにしてそこにヘブライ語の単語の入った一種の混合言語である。だからあのユダヤ人科学者アインシュタインも、若い頃はイデッシュ語を話していたことになる。それに対して「セファルディム」というスペイン系のユダヤ人はスペイン語の一種（ユダヤ訛り）のラディノ語であった。これ以後、オスマン帝国には国外からどんどんユダヤ教徒が移住してきて、ロマニオートよりもアシュケナジムやセファルディムのような外来のユダヤ人の方が多数を占めるようになる。

ドイツから来たアシュケナジムのユダヤ人の一人であるイサーク・サルファティという人の書簡（1454年）によると、「オスマン帝国はユダヤ人の天国である」としていて、オスマン帝国のユダヤ人には居住の自由、財産の処分権が認められていると、故郷や他のヨーロッパ諸都市のユダヤ人に知らせている。このようにしてドイツ諸邦をはじめとする各地から、多数のユダヤ人たちが自発的にオスマン帝国へ流入してきたことが確認できる。ただこの時期、イタリアにもかなりのユダヤ人がいたが、イタリアではユダヤ人がオスマン帝国内へ移住することを厳しく制限していた。つまりこれはベネチアやジェノヴァの貿易国家にとってオスマン帝国は最大の商売敵であり、そこへ優秀な商人であるユダヤ商人が引き抜かれることが不利になると見越してのことであった。

メフメト2世は個人的にもユダヤ人を優遇していて、彼の侍医にヤコブという者がいて終生仕えていた。また彼は外交使節としても用いられて、ベネチアへ準外交使節として遣わされ外交活動を行なった。ユダヤ人というのは現代でも言語能力が高くて、多言語を理解する人が多いし、今も昔もユダヤ人の情報ネットワークというのが強力で各地の情報がいち早く伝わる。このようなことが現実的な政治家であるメフメト2世をしてユダヤ人を重用せしめる理由であった、と言える。そしてメフメト2世以降のスルタンたちもユダヤ人を優遇する政策をとり続ける。

15世紀末～16世紀にかけて、オスマン帝国のユダヤ人に対する根本的な変化をうながす事件が発生するが、それはスペインにいたユダヤ人がオスマン帝国内（イスタンブルやサロニカなど）へ集団的に移住してきたということであった。これはスペイン史の領域になるのだが、1492年にグラナダが陥落してイベリア半島におけるイスラム国家が完全に消滅する。レコンキスタによってイベリア半島がキリスト教徒支配のものになると、半島にいたユダヤ人たち（彼らは様々な非常に高度な技術を持っていたが）約 20 万人のうち半数が国外に脱出する。なぜかというとカスティリャの両王が厳しい

異端審問を行ない、それまでキリスト教徒たちと共存してきたユダヤ教徒たちが命からがら逃げざるを得なくなったからであった。数万のスペイン系ユダヤ人がオスマン帝国へ亡命者としてやって来たとされているが、これをまたオスマン帝国側では大歓迎した。特に第８代スルタンのバイェズィト２世は、「ユダヤ人を迫害する者は死に処する」という勅令を発している。これ以後スペイン系ユダヤ人のセファルディムは、オスマン帝国内の都市で欠くことのできない存在になる。どうしてスルタンたちがユダヤ人を歓迎したかというと、それは彼らの能力であった。特に貿易・金融・医術・軍事技術・国際外交などの分野においてで、この中で貿易・金融に関してはユダヤ商人が有名であり、また医術も有名だが、軍事技術はちょっと意外かも知れない。この頃の武器というのはもう大砲・鉄砲で、これらを鋳造する高い技術がユダヤ人にあったのである。国際外交に関しては、ユダヤ人のネットワークが外交官にとって心強いものであった。このようにこの当時のオスマン帝国では、セファルディムたちを多方面に用いていた。

次に１６世紀オスマン帝国最盛期のユダヤ人について考えてみたい。オスマン帝国の基礎を築いたのは征服王メフメト２世であるが、在位１５１２～２０年のセリム１世が当時東方の最大の敵であったエジプトのマムルーク朝を滅ぼし、アラブ諸国のほぼ全域がオスマン帝国支配下に入る。このセリム１世が他のスルタンと同じようにユダヤ人を重用して、貨幣鋳造や両替などの重要な財政業務に彼らを任用した。ちなみにこの当時のオスマン帝国の貨幣は、鋳造と言うよりも銀などを薄く打ち出したものである。イタリアの貿易都市がそれぞれ貨幣を持っていたことから両替は重要であった。ユダヤ人たちは両替商を営み、そのまま金融業者・高利貸にもなった。イスラム法のもとではお金を貸して利子をとるというのは非合法となっていたが、ユダヤ教徒はそのようなことはないのである。セリム１世の後の時代には、重要な財務長官にさえユダヤ人が任命された。（ただその場合、その人物はイスラムに改宗していた。）

壮麗王スレイマン１世（在位１５２０～６６）の時代は、最も国力が充実し領土も広がった。彼はウィーンまで攻めたが、これによってドナウ川の南側までオスマン帝国の支配下に入ることになった。そして自発的に東方のユダヤ人（アシュケナジム）たちが多数オスマン帝国内の諸都市へ移住を始めた。

ここでヨセフ・ナスィという人物についてである。彼はポルトガル生まれで「マラーノ」であった。「マラーノ」というのはもともと豚という意味だが、これはユダヤ教からキリスト教への改宗者のことで、スペインのキリスト教徒たちが侮蔑的に呼んだ言葉であった。これは厳しいスペインの異端審問の影響がある。マラーノたちは改宗後も隠れユダヤ教徒ではないのかと、例えば豚肉を食べるかどうか（ユダヤ教徒は豚肉を食べない）とか金曜日に礼拝をしていないか（ユダヤ教は金曜日が礼拝日）などと疑われていたのである。そしてまさにこのヨセフ・ナスィは隠れユダヤ教徒であった。彼は国を相手にするような大富豪であったが、異端審問に耐えられず、１５５３年前後にイスタンブルへ移住してくる。彼はオスマン帝国に重用されて、ナクソス島の領主に任命され地中海貿易を左右した。このように１６世紀はオスマン帝国の最盛期であったのと同時に、オスマン帝国内のユダヤ人にとっても黄金期であったと言われている。

これが１７世紀になると状況が暗転する。この時期はオスマン帝国にとって下り坂で、具体的には２つの強敵が現れる。ハプスブルクのオーストリアとロシアの侵攻である。そしてユダヤ人の運命にとっても重要な時期となる。１６４８～４９年にかけてポーランド南東部とウクライナでユダヤ商人に対する小作農民の暴動が起きて、ユダヤ人が大虐殺された。その数は、ユダヤ年代記によると１０万人だということである。この暴動がなぜユダヤ商人たちに対して起こされたのかというと、彼らが土地の持ち主である貴族たちに代わって税を取り立てていたからであった。小作人たちにとっては領主よりも目の前の商人が敵であったのである。ユダヤ人というのは社会で大きなストレスが溜まった時に、その「ガス抜き」の対象とされてしまう。ユダヤ人の情報

ネットワークによって、ポーランドの同胞のユダヤ人たちが殺されたことはオスマン帝国のユダヤ人にも伝わって、非常な危機感を持つことになる。

そのような状況からオスマン帝国内のユダヤ人の間でメシア（救世主）待望論が流行して、ついにシャブタイ・ツヴィという名の人物が現れて自分がメシアであると宣言するのが、１６６５年のことであった。このシャブタイ・ツヴィは、生まれはイズミルであるが、当時オスマン領のパレスチナのガザでアブラハム・ナタンという人物と出会って、実はこの人物が実質的な首謀者であるが、宣伝活動を始める。彼はメシアである宣言をした後、オスマン帝国のみならずヨーロッパのユダヤ人たちにもメシア出現という手紙を発送し、更に行進を開始する。ガザからアレッポ・イズミル・イスタンブルへと渡り、彼は「１６６６年にオスマン帝国の支配者となりスルタンを僕とする」と予告する。この１６６６年という年が問題のある年で、当時ユダヤ教徒にもキリスト教徒にも「千年王国」という思想があって、これは救世主が現れて理想的な統治を１０００年間行なうというものだが、計算によると、その年が１６６６年であると考えられていたのである。しかし彼はオスマン当局によって海上で拿捕され投獄される。更にスルタン臨席の査問会で詐欺師であると告発されて、改宗か死かを迫られる。彼はあっさりとユダヤ教を棄ててイスラム教に改宗し、その後トプカプ宮殿の門番となり、１６８０年にアルバニアで全く普通の人間として死ぬ。この事件そしてその失敗は、ユダヤ人社会に大きな挫折感を与えるものであった。

次の１８世紀という時代は、オスマン帝国のユダヤ人社会について言うならば全く沈滞の時期になる。活動が停滞しユダヤの伝統、特にユダヤ教の戒律や儀式をしっかりと守れなくなってくるのである。ヘブライ語を、ラビたちでさえ忘れてしまうということもあった。さらにこの時代がオスマン帝国の完全な衰退期で、圧倒的に西欧諸国の力が優勢になる。こうなると西欧のユダヤ人の方がオスマン帝国のユダヤ人よりも強いネットワークを持ち、オスマン帝国のユダヤ人がそこからはずされ孤立することになる。これによってイスラム教への改宗者が増加する。これは強制的にさせられたのではなく、自発的にそうしていたのである。こうしてオスマン帝国のユダヤ人が弱体化していくのである。

１９世紀になると、西欧諸国に押されっぱなしだったオスマン帝国で「上からの」（スルタンからの）改革が行なわれた。かつて軍事的に西欧を圧倒していたオスマン帝国は逆に守勢に立たされていた。理由は様々だが、西欧諸国では三十年戦争を経て兵器・戦術が進歩するが、それに対してオスマン帝国は多くの領土を得た後は兵器の改良などは行なわれず、武器の性能にはっきりとした差があったのである。それだけではなく、オスマン帝国は軍事国家で軍隊がスムーズに動員されるはずのものであったのに、それが機能しなくなっていた。こうしてオスマン帝国においてまず軍事面から西欧に追いつこう、更には国家全体の改革が必要だ、となっていくのである。そしてそれらが支配者による「上から」の改革であったのである。ユダヤ人たちはこうした改革運動に積極的に参加しようとした。オスマン帝国のユダヤ人というのは常にスルタン、オスマン国家に対する忠誠心を終始失わなかった、という点で同じ非ムスリムのキリスト教徒やアルメニア正教徒と対照をなしている。そういう点ではトルコ人にとって彼らは裏切らない人々なのである。ユダヤ人の軍務参加の開始というのがあるが、本来ユダヤ人・ギリシア人・アルメニア人などは最初から軍務からはずされていた。それは一人前と見なされていないからであった。１７９９年以降初めてユダヤ人が海軍に採用されるようになると、彼らは認められたということで喜んで参加するのである。ユダヤ人は文弱なイメージを持たれていたが、必ずしもそうではない。また１８２６年には無頼集団と化していたイェニチェリ軍団が廃止されたが、これはユダヤ人社会には朗報であった。なぜならば、ユダヤ人たちは彼らの乱暴狼藉による一番の被害者だったからである。１８３９年のギュルハネ勅令に「ムスリムと非ムスリムとにかかわらず、生命・名誉は保障され、財産を自由に所有できる。財産没収は行なわない」と定められているが、これは逆に言うとそれ以前は非ムスリムの生命や財産が保障されないこ

ともあったということで、ユダヤ人たちもそのようにされる可能性があったわけである。突出して富裕になり過ぎてしまったユダヤ商人の場合、国家によって財産が没収されるということが時々あったのである。勅令ではこのようなことの禁止がはっきりと明文化され、これもユダヤ人にとっては朗報となった。これ以後の青年トルコ運動などのオスマン帝国末期の復興運動において、ほとんど常にかなり有力なユダヤ人出身の運動家の流れを見ることができる。

このようにオスマン帝国のユダヤ人は改革運動に参加するが、19世紀にオスマン帝国が死に体となる、すなわち自国のことを自らで決定できなくなり、財政破綻、銀行から借りたお金が一銭も返せない状況となって、破産宣言をするに至り、破産管理委員会が西欧の銀行の代表によって作られて、彼らがオスマン帝国の内政を左右するようになる。例えばオスマン帝国のタバコは、フランスの1タバコ会社が管理するようになって利益はその会社のものとなり、オスマン帝国は半植民地状態になっていくのである。

このような状況の中で、西欧のユダヤ人によるシオニズムと呼ばれるパレスチナ帰還運動が起こった。これにはオスマン帝国内のユダヤ人はほとんど関与していない。そしてその最大のスポンサーはイギリスであった。イギリスにはユダヤ人の実力者が多く、例えば首相のディズレイリは完全なユダヤ系で、ユダヤ親派であることを隠そうとはせず、公然とシオニズム運動を支援した。考えてみるとパレスチナ地方は1918年まではオスマン帝国の領土なので、そこに西欧のユダヤ人たちを帰還させるということを外国が勝手に決めるということは完全に内政干渉にほかならないのだが、その当時のヨーロッパ人には問題にならなかったのである。そしてイギリスの外相パーマーストンが1840年頃から、オスマン政府に対してユダヤ人のパレスチナ入植を許可するように圧力をかけ始めるのである。その背後にはユダヤ人の帰還に関して、ユダヤ系財閥ロスチャイルド家からの資金援助が約束されていた。このようなイギリスによる内政干渉に対して、オスマン帝国は常に及び腰で拒否することができなかった。

例えば1840年のダマスクス事件というのがあるが、これはダマスクスでカトリック系のカプチン会の修道士がユダヤ人によって殺されたという事件で、オスマン政府が容疑者を逮捕・拘束するとヨーロッパ側はこれをユダヤ人弾圧だと捕らえて、イギリスのユダヤ人代表団がダマスクスまでやって来て当局に譲歩を求める。そうしてスルタンが勅令によってユダヤ人弾圧を禁じて、ヨーロッパの言いなりになるのである。19世紀の帝国主義真っ盛りの時期なので仕方なかったのかも知れないが、オスマン帝国におけるユダヤ人問題というのはもはや、オスマン政府の権限を超えてヨーロッパの列強の言いなりの状態になってしまったのである。

オスマン帝国末期のユダヤ人社会であるが、1908年に青年トルコ革命というのが起こって改革運動を推進してきた青年将校たちが政権を奪取するのだが、そこからドイツ・オーストリア側に参戦して第一次世界大戦に突入してしまう。その結果負けてイラク・シリア・パレスチナを失ない、イギリスやフランスに解体されてしまうことになる。このような状況下のオスマン帝国に対して、それまでムスリムと共存してきたギリシア正教徒・アルメニア正教徒のミッレトがムスリムに対する裏切りとしか言えないような行動をとり続けた。ギリシア正教会は完全にイギリス側につき、その威をかりてオスマン政府に対して非常に多くの要求を突きつけ、最終的にはギリシア人が多数住んでいる地域を、1830年に独立していたギリシアに対して返還するように要求したのである。首都イスタンブルも本来はギリシア人・キリスト教徒の都市であったのだ、とさえ主張した。アルメニア人もオスマン帝国下で必ずしも抑圧されていたわけではなく、むしろユダヤ人などよりははるかに優遇されていたが、オスマン帝国末期には北方のロシア帝国などにそそのかされ、実際援助を受けて、独立したアルメニア国家をつくりたいということで、第一次世界大戦前後に疲弊したオスマン帝国に反旗を翻すのである。

対照的にユダヤ人たちにはこのようなことがな

かった。1892年、この当時オスマン帝国の先行きが暗いものであったにもかかわらず、セファルディム系ユダヤ人のトルコ移住400年を祝う行事が行なわれて、スルタンのアブデュルハミト 2 世に感謝の意を表明するということがあった。またその後、ユダヤ人のミッレトはオスマン政府による陸軍兵士徴用に応じた。(ギリシア正教・アルメニア正教のミッレトはこれを拒否。)第一次世界大戦と戦後の連合軍占領期にはユダヤ人社会は一貫してオスマン帝国への忠誠を守り、例えば1918～23年までイスタンブルがイギリス海軍を中心に占領され、イギリス海軍の代表者が地元のユダヤ人社会に対して協力を要請したが、ユダヤ人の指導者はこれを拒否している。このようにオスマン帝国のユダヤ人が骨の髄までオスマンルになりきれたと言えるほどオスマン帝国に同化していることが分かる。そのことが現在でもトルコ人のユダヤ人に対する見方が、ロシア人やアルメニア人に対してよりも暖かく見える理由だと思われる。

現在のトルコ共和国についてであるが、現在の政府は法律的には正式にマイノリティーの存在を認めていない。トルコ共和国の憲法には「宗教と人種の区別なしに全ての人民はトルコ人である」という条項があって、オスマン帝国時代は多民族国家だったのであるが、トルコ共和国は単一民族国家で、ギリシア人・アルメニア人・ユダヤ人であっても全てトルコ人だというのである。トルコの国勢調査の第一問は常に「あなたはトルコ人ですか？」というもので、単一民族国家にこだわっているのである。確かに現在、ギリシア人やアルメニア人などはマイノリティーとさえ言えないほど数は減っているが、例えばトルコの東部には「クルド人」という民族的・言語的にはむしろイラン人に近い人たちが多く住んでいて、彼らはトルコ人であることを拒否しており、この問題はゲリラという形で出ている。

最後に「ドンメ」という言葉であるが、これはユダヤ教からイスラムへの改宗者のことを指す「転向者」という意味で、スペインの「マラーノ」(隠れユダヤ教徒)と同様の差別語である。ただしオスマン帝国でもトルコ共和国においても、かつてのナチスドイツが行なったような組織的なユダヤ人迫害というのはなかった。例えば1933年にヒトラーがユダヤ人の知識層に対する迫害を行なった時に、トルコ共和国は多くのユダヤ人を亡命者として受け入れ、彼らがトルコの主要な大学の教官に任命されてトルコ共和国の学問の水準を向上させた、と言われている。

ユダヤ教徒の人口についてであるが、正確な数字はなかなか分からないが、拾えたものだけで言うと、

1867年:125，000人
（イスタンブル40，000人）
1927年:　81，872人
（　同　46，781人）
1955年:　40，345人
（　同　36，914人）
1965年:　38，267人
（　同　30，913人）
1990年:　26，000人
（　同　22，000人）

となっている。こうしてみると減少の一途をたどっているが、最大の理由はイスラエル共和国が成立したことで、オスマン帝国のユダヤ人はシオニズムには参加しなかったが、建国されるとやはり移住している。現在トルコ共和国はイスラエル共和国と国交を結んでおり、良好な関係にある。

《　質疑応答　》

Q;スペインやドイツのユダヤ人なら分かるが、なぜミッレトで存在を認められたオスマン帝国のユダヤ人において、ヘブライ語の忘却が進行したのか。　（札幌新川・佐々木）

A. やはり18世紀にオスマン帝国のユダヤ人が、ヨーロッパのユダヤ人のネットワークから孤立したことが大きいと思う。また彼らがギリシア人・アルメニア人に比べて、オスマン社会に過剰に同化してしまったこともあると思う。ちなみに現在の

イスラエル共和国のヘブライ語は、意図的に復活させたものである。

Q；現在でも、かつてミッレトにあったような宗教的意識・教育が残っているのか。

（北星新札幌・松本）

A．ミッレトは完全になくなっているが、あえて言うならばユダヤ教ではシナゴーグやユダヤ人学校ギリシア正教の場合はイスタンブル司教区という形で残っている。

Q；セファルディムに比して、アシュケナジムのユダヤ人たちが果たした役割は何か。

（興部・千田）

A．史料が少なくてはっきりしたことは言えない。セファルディムたちが活躍していたことは言える。ただし後のイスラエル共和国では逆に、アシュケナジムたちが活躍している。

Q；オスマン帝国に同化し過ぎたユダヤ人とギリシア人・アルメニア人の違いは何か。

（興部・千田）

A．地縁的なもの。ギリシア人・アルメニア人は故郷が近いが、ユダヤ人たちは故郷を失った流浪の民で、オスマン帝国に受け入れてもらったという意識がある。

Q；ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒のミッレトどうしの横のつながりはどのようであったか。

（美唄工業・今井）

A．むしろつながらないようにしていた、と考えられる。

Q；オスマン帝国下ではローマ・カトリックは存在したのか。　（北星新札幌・松本）

A．クロアチアにはカトリックがあったし、ハンガリーのトランシルバニアにはプロテスタントもいた。実はギリシア正教・アルメニア正教以外のキリスト教は、一つにまとめられてアルメニア正教のミッレトに含まれていた。

研究発表

「スペイン史 － 3つの謎」

札幌開成高等学校
武田　秀治　氏

【はじめに】

～【「ローマは一日にしてならず」の謎】

私がスペインに関心を持ち始めてから十数年になる。その頃に手にしていた『世界史資料・名言集』（1969年・山川出版社）では、「ローマは一日にしてならず」はセルバンテスの『ドン・キホーテ』の中の言葉だとされており、以来ずっとそうだと思ってきた。自由国民社の格言集にも同じ事が書かれており、有名な樺山紘一氏の『ローマは一日にしてならず・世界史のことば』（岩波ジュニア新書）の第1版（1985年）でもはっきりそう書かれており、「読者はこの言葉にあまり気づかないようだ」と述べている。ところが同書の第7版（1989年）では、「セルバンテスのものだと言われてもいるが、定かではない」と変わっており、どうしてなのか疑問に思ったわけである。

そこで、自分で岩波の文庫本『ドン・キホーテ』正・続編6冊を全文読んでみたが、期待していた成句はなかった。そんな折、94年5月8日付朝日新聞で、セルバンテスに関する研究・資料収集を行なっ

ている鹿児島のアマチュア研究家・尾辻正見氏（ペンネーム世路蛮太郎）を知り、この件に関して質問してみた。返事によると、「続編」第７１章中の「サモーラも１時間では落城せなんだぞ」という文句があり、『スペイン語諺読本』（駿河台出版）にも「サモーラ云々」は「ローマ云々」と同じ意味とあるので間違いない、とのことであった。私は「ローマ」にばかり気を取られて「サモーラ」を見落としてしまっていたのであった。それにしても「サモーラ」は「ローマ」ではないわけで、わからないままであった。

今年２月、書店で『世界の故事・名言・ことわざ』（自由国民社）を見ていたら、『ドン・キホーテ』の邦訳者・高橋正武氏（故人）が、「ローマ云々」と訳された英訳版を邦訳したために、この誤りが生じたと発表した、と書かれていた。そこで、何に高橋氏が発表したのか、その英訳本とは何かを知りたくて出版社や世路蛮太郎氏に問い合わせたが、出版社からは未だ返答がない。世路氏は「コラムの通り」とのことである。

その後、昨年大変読みやすい『ドン・キホーテ』の新訳（岩波書店）を出された東京外大の牛島信明氏と、（セルバンテスに『ドン・キホーテ続編』を書かせる役割をしたとされる）『贋作ドン・キホーテ』を邦訳した神奈川大の岩根国和氏にこの件を問い合わせてみた。岩根教授からは、高橋氏は自分の恩師で亡くなるまで薫陶を受けたが、「ローマ云々」の話は聞いたことがなく、何かの機会に話されたことかどうかも今となっては確認のしようがない、という返事をもらった。どうして自由国民社の本に前述のコラムが載ったのか、いまもってわからないわけだが、「ローマは一日にしてならず」という言葉が『ドン・キホーテ』に出ていないということは確定なようである。ではなぜ「サモーラ」が「ローマ」に変更になったのか、ということについては、自由国民社のコラムに書かれてあるように、英訳の際にイギリスでなじみの薄い「サモーラ云々」を「ローマ云々」に変えて訳した、というのがどうも真相らしく、岩根氏もどこからこのように変わったのか機会があったら調べてみたいとのことであった。牛島教授は、先の岩波ジュニア新書の誤りを指摘したのは自分であり、（「ローマ云々」の成句は）実際は中世ラテン語の諺に由来するようだ、という返事をいただいた。

『ドン・キホーテ』を終わりまで読むというのは大変なことだが、今回出た岩波の新訳（牛島訳）の『ドン・キホーテ』は非常に読みやすいものなので、ぜひ一度チャレンジしてみてはどうか。

【ザビエルと胡椒】

ザビエルと胡椒の謎については、日本史の先生や大学の教授（岩根氏ら）、あるいは『歴史と地理』（山川出版社）の「日本史研究」の賢問・愚問欄に質問してみたが、 いまだかつてわからいままになっている。

ザビエルがローマのイエズス会に送った書簡をみると、来日の際に与えられたマラッカの最良の胡椒３０バレル（約5トン半）で２年半の滞在費をまかなった、と書いてある。別の書簡には、「神父を乗せてくる船は、胡椒をあまり積み込まないで、多くても８０バレル（約１４．５トン）までにしなさい。なぜなら・・・堺の港に着いたとき、持ってきたのが少なければ日本では大変よく売れ、うんと金もうけができるからです」とも書いている。日本の胡椒のことについては、ザビエル研究の第一人者であるドイツのシュールハンマーは言及していない。河野純徳著『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』（平凡社）には「肉食が多くない日本の食事では、胡椒の需要に限界があると見たからである」と書かれているが、どうもこの辺がポイントになるようである。当時の日本で薬として消費されたこともないようである。宮本徳蔵著『スペイン侍』には胡椒のことが出てくるし、スペイン在住でスペイン狂として有名な中丸明氏は（著書『スペイン五つの旅』の中で）「ザビエルが広めたのはキリスト教よりも、むしろ胡椒であった」というような表現をしているが、どうして肉食していない日本で胡椒が必要であったのか、また２年半の滞在費を胡椒でまかなっているということも、わからないままである。

『食の文化史』（中公新書）によると、日本で肉食

を禁止したのは、仏教が広がり始めてから、天武天皇が禁止令を出し、猪・鹿は７２２年の元正女帝の勅令で禁止され、それ以来幕末まで肉食は原則的に禁止になっているわけである。さらにザビエルが来たときだけ一時的に、庶民が肉に触れる事があったとされ、信長・秀吉と肉の関係や、京都の人が牛肉を「わか」と呼ぶのはポルトガル語の「ｖａｃｃａ」が由来だということを述べている。家光の鎖国令で、日本は魚と野菜中心の食文化を完成させていったのだが、出島のオランダ人の影響で、蘭学者の中には将軍家に肉食を勧める者もいた。ということで、上の人たち（貴族・大名）は『薬猟』とか『薬食い』に名を借りて肉を食べていたらしいのだが、この本には胡椒の記述はない。

次に『朝鮮半島の食と酒』（中公新書）をみると、朝鮮にはトウガラシ以前から胡椒がある。１５世紀から、日本の九州・対馬から胡椒を輸入しているという記録があるのだが、時代的に早すぎる気もする。朝鮮では儒教中心なので肉食のタブーがなくなっており、肉食用または薬用として使われるために胡椒がかなり使われているようである。やがて、朝鮮では胡椒が日本でとれるものと思われていたのがそうでないとわかり、胡椒の代わりにトウガラシが使われていくようになる。

ザビエルが堺の港にかなりの胡椒が来ている、と言っているので、『堺・海の都市文明』（ＰＨＰ新書）を見てみると、当時日本で大量に産出していた銀が、東南アジア貿易圏と中国貿易圏を結びつけるものであり、ポルトガルが中国から生糸を日本へ運び、日本で得た銀で東南アジアから胡椒を買ってヨーロッパで売る、という貿易関係ができていたらしく、なおかつ日本に胡椒が持ち込まれていたようである。ところが朝鮮に輸出するにしても中国に輸出するにしても、（位置的にみて）わざわざ瀬戸内海を通って堺に持っていく必要はなく、かえって九州の平戸あたりからの貿易のほうが近くていいような気もする。どうして大量の胡椒が持ち込まれたのか、ということについては、胡椒を１隻の船で何トンも運ぶのは不可能だという学者もいるし、日本で猪とかを一時期食べていたために使われていたのかも知れないが、全くわからない。銀については、当時の日本の銀が、スペインのポトシ銀山にも匹敵する産出量だったのではないかという最近のヨーロッパの研究もあり、問題となっている。

ザビエルについては、１年ほど前の北海道新聞紙上で、５０年前にザビエルの「右腕」が来道していたことについて書かせていただいたことがある。また昨年、福山のカトリック教会で、たまたま来日していたザビエルの「右腕」（肘から先）を見る機会があり、写真に収めた。これは、ローマのイエズス教会に保存されているものである。腕の部分の肉がかなり削がれているが、これは聖遺物崇拝のために細かく切り分けられて各地の教会に配られたためである。遺体のほうは、インドのゴアにある。遺体が腐っていないことが奇蹟ではないかとされて、証拠の品として右腕が切り落とされているのである。肘から上の部分は二つに分けられ、一つは江戸時代まで日本にあったが禁教令のために行方不明となり、もう一つは現在マカオにあると聞いている。

【ベラスケス、その家系の謎】

昨年１２月２日付読売新聞夕刊に、上智大学・大高保二郎教授が『解明進むベラスケス像』という記事を書いた。そこに「ベラスケスはイタルゴ（郷士）ではなかったのみならず、改宗ユダヤ教徒の家系かもしれないことが明らかにされた（プラド美術館紀要最新号）」と書かれていた。大高教授に手紙を送ったところ、『プラド美術館紀要最新号』（英文）のコピーを送っていただいた。実はベラスケスの家系にはユダヤ系の血が流れているのではないか、ということは前々から言われていたのだが、紀要によると最近の研究でそのことが明らかになってきているらしい。

いままでは、父がポルトガルから移住した下級貴族、母はセビリアの出身ということで、一応貴族の流れをくんでいたことになっていたわけである。５７歳の時に描いた、最高傑作といわれる『ラス・メニーナス（宮廷の侍女たち）』の中のベラスケスの

自画像の胸に、サンティアゴ騎士団の赤い十字が描かれている。これは貴族の証明となるものである。絵が描かれたときには無かったもので、サンティアゴ騎士団の騎士に叙任された後でベラスケスが自ら描き加えたとも、国王フェリペ４世が描き加えたとも言われている。とにかく貴族の中の貴族になりたかった、ということは間違いない。

下級貴族（イダルゴ・郷士）というのは、名ばかりの貴族であった。一応貴族と名乗るには異民族（ユダヤ人・モーロ人）の血が混じっていないことや、自分も先祖も職人や商人の仕事にいっさい就いていないことが証明されなければ、貴族の称号がもらえない。（ベラスケスについても）いろいろな審査があって、何回か申請して却下されたのだが、結果的にはローマ教皇とフェリペ４世の推挙によって騎士に叙せられたのである。

それが、大高教授によると、先祖に血統的にも職業的にも疑わしい人がいるのではないか、ということが明らかになったというのである。ことにスペインにおいては、宮廷の中で成功した人物は正真正銘の貴族でなければならない、ということが絶対的に必要であった。ベラスケスは死ぬ９ヶ月前にやっとそれを実現するわけだが、よく「ベラスケスは寡黙」と言われているが、これはどうも先祖の事とも関係があるようである。当時のスペインでは血の純粋さが非常に重要視されていたので、素性の怪しい家系図の持ち主を調べるために、系図調査官が絶えず目を光らせていた。

前述の『プラド美術館紀要』の『ディエゴ・ベラスケスの秘かな経歴』（副題「この画家がサンティアゴ騎士団の申請に於いて隠そうと苦労した家族背景」）を見る。第１章「調査」では、「アントニオ・パロミーノ（ベラスケスの評伝を書いた評伝作家）が述べているように、（中略）フィリップ（フェリペ）４世がディエゴ・ベラスケスに貴族の称号を与えるために、彼のもっとも入会したい騎士団を選ぶように提案した。ベラスケスは、彼の職業の身分について何ら疑いを持たれていなかったので、最も権威のあったサンティアゴ騎士団を選んだ」で始まっている。家系図を騎士団の会議に提出したのち、二人の調査官が父方の聞き取り調査を行う。当時父方の故郷ポルトガルとは交戦中だったため、そこに近いガリシアで調査が行われたが、又聞きのようなものであり緻密さに欠けるものだったと思われる。結果は、古くからのキリスト教徒で、卑しい仕事にも就いておらず、ユダヤ人・ムーア（モーロ）人の血も入っていないし、貴族である、と証言したそうである。セビリアでは、（ベラスケスの先祖が）肉税が免除されていた（肉税免除は貴族身分の証）という証言もあり、会議もこれらの証言に基づいてサンティアゴ騎士団への入会を認めることになるわけである。しかし、その後の調査で１６００年の肉税記録簿に出てくるファン・ベラスケスはベラスケスの母方の祖父ではなく、（実際の）祖父は洋服仕立て人であり商人であった、ファン・ベラスケス・モレノであったということがわかり、（前述の）二人の調査官はベラスケスの害になる資料を無視し、買収した証人で嘘の家系図を証明させた、となっている。父についても、本当はポルトガルで調査を行えばいいのだが、ベラスケスはそれを嫌ってマドリードで調査を行うように希望する。どうも彼自身、父方の方が怪しいと感づいていたようで、そちらで調査されることを嫌っていた節があるようである。

第２章「ベラスケス家」では、母方の祖父ファン・ベラスケス・モレノは、ズボン仕立て、織物、絹仕立て、銀細工人で、商人、不動産賃貸人、そして時として金貸し人であり、奴隷の所有者でもあったと述べられている。さらに借金を返済できず牢獄にいたこともある、とも書かれている。さらに『紀要』には、スペイン現代哲学の祖オルテガ・イ・ガゼットの『ベラスケス論』の一部が引用されているが、それは（ベラスケスが貴族の血筋であるとするような）ベラスケスを神格化するようなロマンチックな内容のものである。スペインでは、スペイン黄金時代の画家・芸術家が純粋なスペイン人であるかのように描く傾向があるようである。

『紀要』の最後に、「私達が、貴族のそして古いキリスト教徒のベラスケスに本質的に身をゆだねたままであるなら、私達はこの画家の背景の探求にバリケードを築くばかりでなく、強迫観念を彼の

作品の解釈に置くものである」として事の本質を明らかにするべきだと言っているらしいのだが、大高教授によれば、ベラスケスはスペインを代表する国民的画家で、しかもその血統が孫娘の結婚からさまざまな家系を経て現在の王室まで流れていることを考えると、その出自の真相を声高にすることは難しいようである。

以前にまとめたものだが、スペインにおけるユダヤ教徒の追放にもふれておきたい。１４９２年の出来事といえば、レコンキスタ完了とコロンブスの新大陸到達の年であるが、教科書ではまだ扱っていないのがユダヤ教徒の追放である。最近いろいろな研究がされており、特に京都大学の小岸昭氏のものが非常に印象的である。１４９２年８月２日をもってユダヤ教徒が国外追放され、当時スペインにいた約３０万人のユダヤ人（うちカトリックへの改宗者が１０万人）のうち、国外に去ったのが約１５万人、そのうち１２万人が言語・環境の似たポルトガルへ、他の３万人は北アフリカ・イタリア・トルコへ移住した。一説には、この追放は財産目当てではないかとも言われている。金銀は持ち出し禁止、持ち物は手に持てる物だけで、大抵の者は徒歩で、中には金貨を呑み込んで金冷えで腹をこわし垂れ流しながらの悲惨な旅だったと言われている。残った非改宗者約５万人は改宗の道を選ぶが、その実体はマラーノ（隠れユダヤ教徒）であった。マラーノの数は先に改宗した１０万人と合わせて約１５万人である。ポルトガルでもやがて追放され、一部はオランダのアントワープ、アムステルダムへ逃れていった。

１９１７年、ポルトガルのエストレーラ山脈の中で約１万家族の隠れユダヤ教徒が発見され、当時の人々は衝撃を受けたそうである。現在、スペインにはユダヤ人が約２万人いるというが、ユダヤ人の口は重く自らをユダヤ人だと名乗る人は少ないとのこと。１９９２年、イスラエル大統領、スペイン国内のユダヤ教指導者、ファン・カルロス国王の間で和解が成立している。

☆

フランコに関しては、ついこの間、色摩力夫氏が日本人として初めてフランコについて一冊の本にまとめた『フランコ　スペイン現代史の迷路』（中公叢書）を出版している。なぜフランコが３６年間にわたって権力を握れたのか、ということはスペイン人側から解明されていかなければこの問題は解明されない、と言われてきたが、ようやく開かれてきたという感じがする。

《　質疑応答　》

Ｑ；スペイン人の血の純粋さと異端審問との関係はあるのか。またフランコのスペイン側の問題について、フランコの長期独裁が可能であったのはなぜか。　（札幌西・吉嶺）

Ａ．異端審問については、審問を行う裁判官や宮廷図書館にいた役人たちの中にコルベンソ（ユダヤ教からの改宗者）がおり、彼らが自分の身を守るために異端を処罰するという形になっていったので、異端審問と密接に関係があると思う。
フランコのことについては、スペイン内戦があまりにも悲惨な状況であり、フランコを倒した場合再び忌まわしい内戦を繰り返すことになりかねない、ということが関係しているようである。

Ｑ；ザビエルの腕はミイラのようだが。
（旭川龍谷ＯＢ・中林）

Ａ．ザビエルの遺体が腐敗しなかったのは、棺に入っていた生石灰の作用と、病気のため瀉血をするなどして身体中の水分がなかったことも関係があるようである。

Ｑ；スペインでは、ベラスケスが貴族であってほしいというナショナリスティックな意見があるのか。宮廷画家だからなのか。　（札幌南・華輪）

Ａ．宮廷で成功した者はそうであってほしいというのがあるのかも知れない。

Ｑ；ザビエルの右腕の写真を見ると、ジュラルミンケースのようなものの外側に木製の観音開きの

ケースがあるようだが、これも一緒に送られてきた物なのか。　（名寄恵陵・櫛井）

A. そのようである。

Q；戦国時代の雑兵に配られる袋の中に、胡椒が入っていたと聞いたことがあり、もしそうだとしたら全国的にも相当量流通していたとも考えられる。気付けの薬とか、のどの渇きをとるとかにも使われたそうだが、そういう形で民間に流通していたとしたら、あまり仰々しくは文献に残らないと思うが。　（札幌平岸・田中）

A. 紀伊半島では鯨の肉を食べるときに使ったとか猪の肉の臭みを消すためにも使われたようであるが、それにしても量が多いし、たぶん中国や朝鮮との関係で考えるとうまくいきそうな気もするが。

☆　☆　☆

◆◆　新刊紹介　◆◆

世紀末から新世紀へ・・・ということで、書店の歴史コーナーのみならず世界史に関係する書籍が数多く見受けられる昨今である。

ここでは、重厚な専門書というわけではないが、昨年に刊行されたもので、普段の世界史の授業で利用できそうな、あるいは参考になりそうな３冊を取り上げたい。

『地名の世界地図』

（21世紀研究会編／文春新書）

地理の授業で生徒に説明をしていて、気がつくとなぜかいつも（地理の内容から大幅に離れて）歴史の話で終わっていることに、我ながら自己嫌悪を感じるのだが、最近は歴史の教師が地理を教えているのだからと、妙に開き直っている自分がいる。

そういう私にとって地理の授業のみならず、世界史の授業でも使える地名辞典になってくれそうなのが、「地球を埋め尽くした国名、都市名をはじめとする地名は、戦争と民族の大移動、大航海によって生み出された壮大な歴史の大辞典なのだ」という本書である。

世界史の教科書に大量に出てくる地名に、生徒はうんざりしないわけがないのだが、そんな無味乾燥とも思える地名の１つ１つに、実は、隠された、あるいは意外な、または予想外な意味があることを知っていたら、歴史はさらに楽しくなるのではないだろうか。

本書では、第１章「地名は古代地中海から」から第９章「自然が生み出した地名」まで、世界の各地域の地名について、各時代の歴史的事件や民族の固有の生活文化といった情報を絡めながら、その起源や由来が実に簡潔に解説されている。正直言って「もう少し詳しく知りたい！」という部分もあったりするのだが、それは参考文献に任せることにしたい。

巻末に「国名・首都名でわかった地名の五千年史」という大索引があり、これも含めてコンパクトに授業に利用できるのではないかと思うが。

『シネマウォーク in World History Ⅱ』

（伊藤弘成著／山川出版社）

以前、「『名作』と言われる作品を今の生徒は知らないんだよなあ、小説にしても、絵画にしても、映画にしても・・・」と先輩の先生が嘆いていたのを耳にしたことがあった。

授業の中で、「この出来事は実はこの映画のこの場面で・・・」などと言っても一向に話が通じないという経験は確かにあるが、だからといって今の生徒が映画を全く受け付けないわけではなく、「最新の」「話題の」「流行の」という修飾がなくても、良い

作品に感動できる心はあるはず、とは思っている。そうは言うものの、実際に授業の展開の中で、あるいはゆっくり時間をとって、世界史に関する映画を観せたいとは考えるが、生徒の理解度や効果、設備的な面や授業進度等がやはり気になってなかなか実現しないのだが・・・。

本書は、人類創世からカースト制度までの70作品を取り上げた同名タイトルの続編で、近現代史の47の映画作品を紹介している。パートⅠと同様に、歴史を主題にした作品のストーリー解説と、授業の中で特にここを見せたいという場面を、VTRの検索カウンター（経過時間）の数字とそのシーンの所要時間とともにピックアップした「ここを観る！」が、大きな特徴となっている。その他にも各作品にまつわる裏話コーナーとも言える「シネマこぼれ話」も大変興味深く読める。

今回著者によって取り上げられた作品は、『ドクトル・ジバゴ』や『追憶』といった映画史の中の不朽の名作から、『セブン・イヤーズ・イン・チベット』『プライベート・ライアン』『さらば、わが愛／覇王別姫』などの最近の話題作まで扱っており、映画を利用した世界史学習のガイドブックとして、有効な一冊であろう。

授業で、生徒に、というよりはまず自分で読んで（まだ観ていない映画については特に）参考になった一冊である。

『音楽のヨーロッパ史』

（上尾信也著／講談社現代新書）

ここ数年来、音楽教材を授業にどのように取り入れるか、ということを個人的に考えてきたが、古代から近現代まで、世界のさまざまな地域における歴史と音楽の関係を見ると、実に音楽はいろいろな材料を私たちに提供してくれるのではないかと思う。しかし、関連書には「音楽史」の分野に関するものが多いのだが、なかなか「世界史」の中の「音楽」という観点で書かれているものが意外と少ないような気がしている。

本書は、そのまえがきで「西洋音楽史のはじまりをバッハに帰すのかグレゴリオ聖歌に帰すのかに、この本は無関心である。『音や音楽を通して時代を描く』こと、これが本書の試みであり、音や音楽が歴史の現場にどのように立ち合い、歴史を動かす者にとってどのような意味を持っていたのか、音や音楽が誰によってどのように利用され、時代を動かしたのかという疑問にこたえることが、本書の目的である。」とあるように、「歴史」を「音楽」という切り口で見せるという視点で書かれており、音楽学や音楽史の知識がそれほどなくても、音楽とともに歩んだヨーロッパの歴史を充分に概観できるものになっている。

Ⅰ章「古代の支配する音」ではローマのパンとサーカス、それを求める民衆と悪魔の芸能を否定するキリスト教との板挟みになる皇帝について述べられているが、Ⅱ章「天使の奏楽」では、逆に中世キリスト教が声や音楽を利用した戦略で人々に影響力をもったと著者は指摘している。いずれにしても「音」「音楽」が人々の心をつかむ優れた方法であることを、歴史は証明しているのである。さらに「音楽」は「絵画」とともに意図的に情報戦略の手段として使われてきたと、Ⅳ章「音の宗教改革」で述べられているところが、非常に興味深い。ここは宗教改革の授業の中でもっとふれられて良い部分ではないだろうか。情報戦略という側面からは、Ⅵ章「国歌と国家」において、国歌が戦争音楽とともに民衆に対する政治的プロパガンダとして背負わされた負のイメージについても言及されている。

本書を読んで改めて、音楽・時代・歴史は切り離せないものであると実感した。今後非ヨーロッパ地域に関して、またさらに異なる視点から、「世界史」の中の「音楽」書が出版されることを期待したい。

<札幌南陵　吉田　徹>

▼第３２回大会予定

日　　時	平成１３年８月４日（土）
会　　場	札幌市教育文化会館
講　　師	未　定
研究発表	未　定　（募集中）

＠世界史研究会のホームページ＠

北海道高等学校世界史研究会
http://kigaru.gaiax.com/home/sekaishi

■編集後記■

昨年は世界史研究会３０周年ということで、『三十周年記念誌』を発行した関係上、２年ぶりの会報～第７号の発行となりました。まずは第３１回研究会の記録者の先生方に感謝申し上げます。また今回初めて会報の編集を担当しましたが、不慣れなために事務局並びに関係の先生方にいろいろとご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び致します。今後とも紙面の充実に力を入れていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。　（札幌西陵・中川雅史／札幌南陵・吉田　徹）